

「デジタルジャパン」の原案等の策定に関する意見募集に関して

(株)ヒルサイドコネクション

代表取締役 本田勝之助

連絡先：非公開

「Net」や「E」と、「リアル(R)」で論じられ、政策を進めてきた背景に、国家経営、地域経営を鑑みると、「Netスケープ」に「リアル(R)」がインターネット初期段階と比べるとだいぶマージしてきた。

Netの特性上、国境を越えた情報ネットワーク、リアルタイムな情報発信、インタラクティブなコミュニケーションがひとつの特徴であるが、その特性と対峙する「Landスケープ」の価値が高くなっていることに気づく。

その土地にいかなければ入らない情報、その土地でなければ決して実現しない産物、その地域にいかなければ決してできない体験、会えない人。

「リアル(R)」な生活と、「Net」の関係で発展してきたデジタル化、情報化の戦略を構築する傾向が高い。その結果、「リアル(R)」に「Net」がマージされてきて、新たな生活スタイルが形成されていくからこそ、真逆にある「Landスケープ」の価値に注目したデジタル戦略が必要であると思われる。

「リアル(R)」と「Netスケープ」で捉えた情報化戦略を、「リアル(R)含むNet」と「Landスケープ」と捉えなおした情報化戦略の視点への提起である。

デジタル化の普及が遅れている農業についてこそ、または、日本地方への観光価値こそ、この「Landスケープ」の価値がデジタル化への政策で飛躍的に高まると実感をもっている。

何千年、何百年の積上げ、または今の気候風土があるからこそ、実現されてきた肥沃の大地、特徴のある土壌、風光明媚な自然の価値がある。その農業や自然観光に関する分析やデータがデジタル化され一般的なデータ利用を可能とするものがほとんど存在しない。

ある、京都の農地をもつ地主は衛生からの気象データを契約して入手し、自分の土地が何の農作物、品種品目にむいた場所かをよく分析している。それは、マーケットの動きにも合わせてその生産場所や生産方法、生産品種品目を微妙に調整して高い市場価値を維持

している。

もう一方で、その場所で、めあての品種品目を作る技術者（農業家）についてはもっともスキルの高い人を採用している。もちろん、変えることもあるのである。

日本農業がその恵まれた土壌や気候がありながら、貧してしまう理由の一つは、その場所や土壌がマーケットのトレンドも踏まえて、適地適作物を選び間違えていることにある。トレンドを追って後手になって価格が下がったり、さほどの品質が実現できなかつたり、自己所有の土地だけに、目先の反収にとらわれて、足元の価値、その地域の価値を客観的に知ることができるデジタル化が普及していないのである。

もちろん、市場データを合わせてこそより価値があるがそれを実現するのでもまたデジタル化の特徴である。

最近のエコへの関心の高さも上記の事柄に関連してくる。

農地の価値やその安全性は、一つは水の流れ、風の向きにある。風の把握は難しいにしても、処理場の下に水脈が位置する農地の安全性を確保することなど、地域の全体的な環境戦略、エコ戦略が求められている。

分かりやすく言えば、地域、地方を企業のようにとらえた、環境報告書の提案である。Regional Governance System として、水脈や土壌の特性を表す（マップとして）デジタルデータと、日照条件、気象条件によってその場所に適した農産物のマップ、地震や災害のシミュレートしたマップデータ、歴史や文化の特徴を示したデジタルマップを、用途に合わせて重ね合わせながら、ストーリーのある農産物の商品開発、生産管理方法、危機管理手法など、地域を統治（経営）するためのデジタルデータを地方自治体や、必要な機関にデータを提供したり、操作できるシステムを開発し、利用を促進したり、ひいては、個人農業者でも活用できるような利便性を実現していくことで、対市場への「Landスケープ」の戦略構想が実現し、また管理トレースできるようになることがビジョンになるのではないか。

それは、「Netスケープ」における市場のボーダレス化が成熟していくと、そこではシェアできない「Landスケープ」の価値こそが差別化となり、日本としての国際価値がより見出されていくと思われる。

今までは、それが複雑な関係性で営まれている自然を相手にすること、または中央よりもむしろ地方にこそそういった価値が多く存在すること。この二つはデジタル化、情報化を遅らせた根本的なポイントであろうと思う。これからは、一見後回しにしてしまうことを長期的な構想で早めに着手し実現していき国としての強みにすることではないかと思う。